

日本ハーシェル協会1998年年報

協会の活動

10月28日-11月3日 木村代表幹事渡英、ウィリアム・ハーシェル協会関係者と懇談

11月3日 創立14周年年会

11月8日 当ホームページ開設

会報

第84号（1月）

第85号（3月）

第86号（5月）

第87号（7月）

第88号（9月）

第89号（11月）

The Herschel Society of Japan Yearbook 1998

Activities of the Society

28 Oct - 3 Nov: Mr Kimura, the General Secretary visited UK to have meetings with members of the William Herschel Society.

3 Nov: The Annual Convention

8 Nov: Opening of the Society's homepage in the Internet

Newsletters

Issue No 84 (January)

Issue No 85 (March)

Issue No 86 (May)

Issue No 87 (July)

Issue No 88 (September)

Issue No 89 (November)

ニューズレター第85号（1998年3月）

ヘッドライン

カロライン・ハーシェル没後150年
「注目記事」で紹介しています。

ハーシェル演奏会成功

昨秋（1997年）の日本アマチュア天文研究発表大会「星の祭典」でのW. ハーシェルの作品を中心とした演奏会を収録したCDやVTRが希望者に頒布され、多くの感想が寄せられました。

ニューズレター（第48号～第85号）主要記事

ニューズレターは通巻400ページに達し、近く合本を作る予定です。

注目記事

カロライン・ハーシェル没後150年
来年はウィリアム・ラッセル生誕200年

事務局・木村

ご承知、98歳という長寿を全うした優れた天文学者カロライン・ハーシェルの没年は1848年（命日は1月9日）です。今年はその満150年という節目の年ですが、わずか2年後には生誕250年を迎えますから、記念行事などは後者の方でという考えもあります。昨年（1997年）秋の年会では十分話し合う時間がありませんでしたが、当協会では没後150年を記念して、会員の発想に基づく行事を進め、あるいはバックアップしたいと思います。ぜひご提案などお待ちしておりますので、よろしく。今春（1998年）3月イギリスのウィリアム・ハーシェル協会の年会でも得るところを期待しています。

記念の年と言えば、ニューズレター第65号・第69号・第73号などで紹介したこともある英国のアマチュアのウィリアム・ラッセルが、来年生誕200年を迎えます。ジョン・ハーシェルより7年後に生まれたラッセルは、前者と同じように裕福な家庭に育ち、また夜空の良い地を求め、自作の望遠鏡で微光天体の観測に励みました。ラッセルの機械は赤道儀式の反射望遠鏡で、これをリヴァプールからマルセイユ経由で地中海の小島マルタに運び込みました。マルタ？ ええ、第2次大戦後に独立した共和国で、今はロンドンからの直

行便が毎日飛んでいますから、東京から行くには乗り継ぎの都合によっては隣のイタリア経由より便利かも知れません。実は昨年暮れ同島に3泊する機会があり、幸いなことに同国天文協会のエドウィン・カミレリさん他3人の方々にお会いできました。ラッセル望遠鏡建立の地点について尋ねたところ、首都ヴァレッタの旧市街の高台と新市内の海岸近くという手掛かりが得られました。ケープタウンのハーシェル・メモリアル（ニューズレター第49号）のようなラッセルの記念碑をこの地にも、という話になり今後が楽しみです。

ついでにさらに先のことをひと言、それは2001年元日つまり21世紀初日に満200年を迎える天文学上の大きな出来事で、小惑星第1号セレスの発見。舞台はマルタから100余kmのシチリア島にあるパレルモ天文台です。

ニューズレター第86号（1998年5月）

ヘッドライン

しばしば転居したW. ハーシェル（1）

「注目記事」で紹介しています。

アマ天大会に於いてW. ハーシェルの曲演奏

1997年10月に開催された第30回日本アマチュア天文研究発表大会の「星の祭典」ではW. ハーシェルの作品が演奏されました。大会副実行委員長の重久長生さん（協会会員）から、その経緯についての手記が寄せられました。

ジョン・ハーシェルの生涯（連載第12回）

日本ハーシェル協会編集の「ジョン・ハーシェルの生涯」の連載です。

注目記事

しばしば転居したW. ハーシェル（1）

A. E. ファニング

（日本語訳：木村達郎）

後にオブザヴァトリー・ハウス（観測館）として知られるようになった場所に最終的に落ちついた1786年までの間、W. ハーシェルは非常に転居の多い生活を送り、同じ家に2～3年以上住み続けることはほとんどなかった。彼と彼の兄ヤコブは1757年にほとんど所持金もなくロンドンにやってきて、1759年の秋にヤコブがハノーバーへ帰るまでの間、友人たちと下宿生活をしていた。ウィリアムはロンドンが「音楽家の供給過剰である」のを知って、ヨークシャーのダーリントン伯爵の私兵団軍楽隊長の職に応じたのである。

ヨークシャー

ダーリントンで働いていた間には、他のことを楽しむ時間がたくさんあったので、以来2年間に彼は主に馬に乗ってあちこちへ旅行し、音楽の指導をしたり音楽会を開いたりしていた。しかし、ひっぱりだこであったにもかかわらず彼はうれしくなかった。「家もなく落ちつくところもない生活には飽き飽きしました。...結局どうなるのか、私にも判りません」と彼はヤコブに手紙を書き送っている。

数年後にドンカスターのオルガニストであったミラー博士なる人物がウィリアムを「見だし」、ドンカスターに来て彼のところに住むように誘ったというのであるが、ウィリアムが息子ジョンに語ったように、これは実現しなかった。（「ミラー博士はどうやら自分を本来以上に過信していたらしい」）。

1762年の春にウィリアムはリーズの市民音楽会の指揮者に任命され、その後も長年に渡って良き友人づきあいを続けたバルマン夫妻の家に下宿して、楽しい4年間をそこで過ごした。1766年8月にはオルガニストとしてハリファクスに移ったが、たった3か月で今度はバースのミルソン街にある新しく高名なオクタゴン・チャペルのオルガニストとしての指名に応じるために転居したのである。

バース

彼に新しい職を与えてくれたデ・シェール博士夫妻のもとに一時滞在したあと、ウィリアムはバースでの下宿先を見つけたが、弟子が増えてきたため、すぐにビューフォート広場に家を借りなければならなかった。ここには友人のバルマン夫妻も一緒に滞在した。バルマン氏がオクタゴン・チャペルの執事の職を得ていたからである。

次の転居は1770年4月に、ウィリアムがニュー・キング街7番地の家を年30ギニーで借りたときである。彼の3人の兄弟が別々にここを訪れたが、弟アレキサンダーは結局ずっと残ることになったし、1772年に妹カロラインが兄たちのもとで暮らすことを許されてやってきたのもこの家であった。また、その翌年にウィリアムの天文学への関心が本当に高まったのもこの家でのことだった。

1774年の夏に一家は「ウォルコット・ターンパイクにほど近い」とされるバース郊外の家へ再び転居した。この家には工房にできるような納屋と厩舎があって、観測のできる敷地もあったが、コンサートホールからは遠くて不便だったので、3年後にはニュー・キング街に戻ってきた。バルマン夫妻は1775年に彼らと別れ、リーズに帰っていった。

ニュー・キング街19番地の新しい家には南向きの庭があった。だから2年後（1779年）に彼らが街の中心部へ、今度はリバーズ街5番地へ転居したことは理由がよく判らない。この家には庭もなかったが、そのことが後に重要な影響を及ぼしたのである。ある夜ウィリアムが通りで月を観測していると、ウィリアム・ワトソン博士という人物が立ち止まってちょっと見せてほしいと頼んだ。彼がハーシェルを当時設立されたばかりのバースの「文学哲学協会」に紹介したのであり、ウィリアムが王立協会に提出した、天王星に関するものを始めとする初期の論文を読んだのも彼なのであった。

ハーシェル一家は2年後にニュー・キング街19番地の快適な家へ戻った。ここでウィリアムは1781年3月13日に、彼らの人生を変えただけでなくその後の天文学の発想方法を根本的に覆す大発見を行ったのである。この家は今ハーシェル・ハウスと呼ばれ、ハーシェルが暮らしたことが判っている家の中で唯一現存している。ここにはハーシェル博物館が置かれ、ウィリアム・ハーシェル協会の本部となっている。

ニューズレター第87号（1998年7月）

ヘッドライン

ジョン・ハーシェル「マイクロ化による文書保存計画」（1）

ジョン・ハーシェルの写真技術との深い関わりのうち、文書をマイクロフィルムの形で保存するアイデアを提唱したことについて、協会会員の中崎昌雄さんがニューズレター向けに書かれたものの前半です。

しばしば転居したW. ハーシェル（2）

「注目記事」で紹介しています。

「カロライン・ハーシェルの七宝絵皿」制作をめぐって

個展でカロライン・ハーシェルの絵皿ほかの七宝作品を出展される飯沢能布子さん（協会会員）の、制作活動をめぐるエッセイです。

「大英博物館」展、神戸・北九州・東京で

表題の展覧会のお知らせです。

W. ラッセルの記念板（記念望遠鏡も？）設置計画

1999年に生誕200年を迎えるイギリスのアマチュア観測家ウィリアム・ラッセルのマルタ島遠征を記念して、現地に記念板を設置する計画が具体化しそうです。

注目記事

しばしば転居したW. ハーシェル（2）

A. E. ファニング

（日本語訳：木村達郎）

バークシャーとバッキンガムシャー

王室天文官に任命されたウィリアム・ハーシェルはウィンザーの近くに住むことが必要となり、1782年の夏に彼とカロラインはテムズ川に近く国王の居城から2マイルほどのダッチェットに転居した。この家は「紳士の狩猟小屋」と称されはしたものの、非常に荒れ果てていた。しかし快適な離れの建物があつたし、観測のための敷地もあつたので、ウィリ

アムは喜んでいた。20フィートの大望遠鏡が初めて組み立てられたのはここであった。しかし冬になると湿気が多く水浸しになるため、3年経つとウィリアムは重い病気になってしまい、転居せざるを得なくなったのである。

オールド・ウィンザーのクレイホール・ファーム・ハウスはウィンザー大公園の端にあって国王の居城からわずか1マイルの距離であり、ウィリアムがすでに計画していた40フィートの望遠鏡を建設するのに絶好の場所を提供してくれるはずだった。しかし、彼は（カロラインが「訴訟の好きな女性」と呼んだ）家主と交渉しなければならなかった。家主の女性は、ウィリアムが家屋敷に手を加えれば、家賃を上げることになるのではないかと恐れたのである。そこで、たった9か月後の1786年4月に、スラウへ最後の転居をしたのであった。（クレイホール・ファーム・ハウスは1842年に王室弁務官に払い下げられたが、1979年に解体されてしまった。王室弁務官がこの建物の歴史的意義を認識していなかったためだろう。）

オブザヴァトリー・ハウス（観測館）として知られるようになった建物は、かつては辺りを取り囲むたくさんの見事な榆の木のために（その多くをハーシェルが地平線近くの視界を得るために伐り倒してしまったのだが）「木立の館」と呼ばれていた。この家はボールドウィンという名前の裕福な一家のものであり、その一家の娘メアリーが1788年にウィリアムと結婚したのであった。この家は後に「蔦の館」と改名された。ウィリアムの結婚後、カロラインは庭園のコテージに移り住み、その屋根から彗星を搜索していたため、やがてオブザヴァトリー・コテージとして知られるようになった。オブザヴァトリー・ハウスという名前は後に19世紀になって付けられた。ウィリアムが40フィート大望遠鏡を建設したのはここであり、50フィート以上の高さにそびえる望遠鏡は50年に渡ってイギリスの国土測量局発行の地図で分かりやすい目標物とされたのである。

ウィリアムは1822年に死去したが、この家は1960年に解体されるまでハーシェルー族が使用し続けた。

とはいえ、ちょうどハーシェルの望遠鏡が当時の技術の最先端だったように、その土地に現在イギリスの最先端のコンピューター会社であるICLの本社が置かれているのはよく似合っているし、その建物は今でもオブザヴァトリー・ハウスとして知られているのである。

ニューズレター第88号（1998年9月）

ヘッドライン

飯沢能布子七宝展、成功裡に閉幕

東京・日本橋丸善で開かれた標記の個展には、協会会員も会場を訪れて七宝作品の数々を鑑賞し、飯沢さんとの懇談の機会もありました。

マルタ天文協会からわが協会への手紙

「注目記事」で紹介しています。

ジョン・ハーシェル「マイクロ化による文書保存計画」（2）

ジョン・ハーセルの、文書をマイクロフィルムの形で保存するアイデアについて、協会会員の中崎昌雄さんがニューズレター向けに書かれたものの後半です。

注目記事

マルタ天文協会からわが協会への手紙

ニューズレター第87号の5ページでマルタ天文協会会長の手紙を紹介しました。記念板のための寄付、読者の反応は今一つです。しばらくお待ちしています。どうぞよろしく。

5月16日、同協会の別のメンバーA. ガレア博士から、次のような手紙が届きました。

「貴協会のニューズレターにぜひ記事を書かせてください。ラッセルのマルタ関連の調査は進行中でまだまだ尽きることがないので、ラッセルの滞在について完全で学術的な結果をまとめることは難しいのですが、マルタ滞中に特に絞ってラッセルの略歴を書いたとすれば、それもまた興味深いのではないのでしょうか。主に時間的経過に従った連載記事になるかと思えます」。

3日後の19日、同人からわが協会編集長宛てに長文の手紙が同封されて参りました。

「編集長殿。私は最近日本ハーシェル協会幹事の木村精二氏が休暇でマルタにいらしていたときにお会いする機会があり、ウィリアム・ラッセルの、この地中海の小さな島との前世紀における関わりについて木村氏と意見を交わすことができました。日本ハーシェル協会ニューズレターのバックナン

バーを拝読しましたが、ウィリアム・ラッセルについてはニューズレター第69号（1995年7月号）の4ページに書かれています。同号の発行からすでにほぼ3年経っていますが、その記事のいくつかの点について詳しくご説明したいと思います。ウィリアム・ラッセルはマルタに2回来ています。1852年にラッセルはひと冬、マルタの首都ヴァレッタで観測を行って過ごしたのです。ラッセルは実際に望遠鏡を聖ヨハネ騎士団の砦に設置しました。砦は街を囲む防壁の他の部分よりも高い構造物だったからです。その時ラッセルが使った望遠鏡は24インチの赤道儀式で、リヴァプールで最近復元されました。1861年にラッセルはマルタに戻り、さらに大きな48インチ望遠鏡を使って1865年までスリエマのティーニエで観測を行いました。3つの補鏡のうち1つだけは今日まで残っていることが知られており、ケンブリッジ大学の天文学部で発見されて現在はウィップル科学史博物館に展示されています。望遠鏡の残りの部分は、ウィリアム・ラッセルがこの望遠鏡をオーストラリア・メルボルンの新しい天文台に売却しようとして失敗した後、壊されてしまったということです。この記事がみなさんにとって興味深いものであればよいのですが。日本ハーシェル協会と今後も連絡を取り合うことを期待しています」。

早速したためた礼状の後に、次のように付け加えました。「いつでも、どんな分量でも、投稿をお待ちしています。写真、地図、イラストなど歓迎します」。何号後になるかわかりませんが、ご期待ください。

日本語訳：木村達郎

ニュースレター第89号（1998年11月）

ヘッドライン

平面投射図で表したハーシェルの太陽運動

W. ハーシェルの太陽運動の研究について、協会会員の佐藤明達さんの論文の概要が掲載されました。

ハーシェルの星観望会

協会会員の成田広さんの天体観測所で、10月4日に観望会を実施するお知らせがありました。

「宙のささやき・地の調べ」北国の七宝展を見て

協会会員の飯沢能布子さんが開催された、星座やハーシェルの肖像をテーマにした七宝展の感想が寄せられました。

日本ハーシェル協会創立14周年年会

11月3日に協会の年会を東京・池袋で開催するお知らせがありました。

大英科学博物館展＋ライフスタイル展

「注目記事」で紹介しています。

注目記事

大英科学博物館展＋ライフスタイル展

ニュースレター第87号でお知らせした「大英科学博物館展」が、神戸・北九州に続き、東京ではライフスタイル展がプラスされ、7月22日から8月30日まで開催されました。入口近くに、1781年のハーシェルの7フィート望遠鏡が展示され、その説明文に、ハーシェルは「・・・これと同型の望遠鏡を使って1781年に奇妙な天体を発見。多数の天文学者が観測した結果、新惑星であることが判りウラノス（天王星）と命名・・・」と、明確に記述されています。「この望遠鏡を使い天王星を発見」などと書いた刊行物は誤りです。

協会会員の石橋力さん（相模原市）は、望遠鏡のメカ等に非常に詳しい惑星観測者です。同展を見たあと電話をいただき、ハーシェル望遠鏡がロンドンの科学博物館に戻ったら、手に取らせて貰えないだろうか、焦点距離の信じられないほど短いという接眼鏡も一緒に、というサジェスションがありました。来春になったら打診して、8月に彼の地でも

見られる皆既日食観測の前後、ロンドンを訪ねませんか。

Newsletter No 85 (March 1998)

Headlines

- 150 years since Caroline Herschel's death

Please refer to the **Main article of this issue**.

- Herschel concert was successful.

A concert mainly of W Herschel's works was held in "Star Festival" in Japan Amateur Astronomical Conference last autumn. CDs and video tapes of the performance were distributed and many members wrote to the editor to convey their impressions.

- Main articles of Newsletters (No 46-85)

Newsletter has reached 400 pages in total, and will be published in a combined book.

Main article

150 years since Caroline Herschel's death

200 years since William Lassell's birth next year

Kimura, Secretary of the Society
(Translation to English by Tatsuro Kimura)

As you know, it was in 9th of January, 1848 when the excellent astronomer of 98-year long life, Caroline Herschel died. The 150th anniversary of her death will come this year, but 250th anniversary of her birth will come only in 2 years, and some might think a commemorative activities could be held in 2 years later. Although we could not discuss this subject enough, the Society is going to conduct or support such activities according to members' ideas. Any ideas are welcome. I hope I can come across good ideas in the annual conference of British William Herschel Society held in this March.

Talking of anniversaries, British amateur astronomer who we introduced in the Newsletters No 65, 69, 73 and some other issues, William Lassell will celebrate the 200th anniversary of his birth next year. Lassell was born in 7 years after John Herschel's birth, and was grown up in rich family similarly to Herschel. Lassell searched a place with good night sky and endeavour to observe faint astronomical objects with a telescope of his own

making. His equipment was a reflecting telescope on nasmyth mount, which he carried from Liverpool, via Marseille to a small island of Malta in the Mediterranean Sea. Malta? Yes, Malta is a republic which declared independence after the World War II. Today direct flights from London are available every day and they may be more convenient than flights from Italy neighbouring to Malta, according to time of connection with flights from Tokyo. In fact, I had an opportunity to stay the island for 3 nights in the end of last year, and fortunately could meet Mr Edwin Camilleri and other 3 people from Maltese Astronomical Society. I asked where Lassell had installed his telescope and they suggested me the place might be on a hill in the old city of the capital Valetta and near the shore in the new city. We talked about an idea to build a such memorial for Lassell as the Herschel Memorial in Capetown (cf newsletter No 49), and I am looking forward to following discussion in the future.

In the meantime, I would like to mention the further future. It is a great event in the history of astronomy, which will celebrate the 200th anniversary in 1st of January, 2001, the very first day of the 21st century; the discovery of the asteroid No 1, Ceres. It took place in Palermo Observatory in Sicily Island in about 100 kilometer distance from Malta.

Newsletter No 86 (May 1998)

Headlines

- **Where did William Herschel live? (1)**

Please refer to the **Main article**.

- **Herschel's musical works played at JAAC**

William Herschel's musical works were played in "Star Festival" in the 30th Japan Amateur Astronomical Conference in October 1997. Mr Osao Shigehisa, a vice chairperson of the executive committee and a member of the Society, wrote how he managed the performance.

- **The life of John Herschel (12)**

No 12 of the serial story of "The Life of John Herschel" edited by Herschel Society of Japan

Main Article

Where did William Herschel live? (1)

A E Fanning

Until he finally settled in what later became known as Observatory House in 1786, William Herschel led a very peripatetic life, seldom remaining in the same house for more than a few years. Arriving in London penniless, in 1757, he and his brother Jacob lodged with friends until Jacob returned to Hanover in the autumn of 1759. William, finding London 'overstocked with musicians', accepted a post in Yorkshire as head of the band of the Earl of Darlington's private Militia.

Yorkshire

The job at Darlington gave him plenty of time for other pursuits and for the next two years he traveled widely, mainly on horseback, giving lessons and organising musical occasions. However, although he was much in demand, he was not happy. As he wrote to Jacob, 'I am almost tired of having no home or place to be fixed in... I do not know what will become of me at the last...'

Some years later a Doctor Miller, organist at Doncaster, is reported to have claimed that he 'discovered' William and invited him to come and live with him but, as William told his son John, this was not true. ('Doctor Miller, it seems, assumed a credit to himself more than his due'.)

In the spring of 1762 William was appointed Director of Public Concerts at Leeds, remaining there for four happy years and lodging with a Mr and Mrs Bulman, who remained good and faithful friends for many years. He moved on in August 1766 to become organist at Halifax but, after only three months, moved on again to take up an appointment as organist of the new, prestigious Octagon Chapel in Milsom Street, Bath.

Bath

After staying briefly with Dr and Mrs De Chair, to whom he owed his new position, William found lodgings in Bath but, as the number of his pupils increased, he soon found it necessary to rent a house in Beaufort Square. Here his friends the Bulmans joined him, Mr Bulman having secured the post of Clerk to the Octagon Chapel.

The next move came in April 1770, when William rented No. 7 New King Street, for thirty guineas a year. All three of his brothers visited him here at different times, Alexander finally remaining permanently, and it was to his house that Caroline was brought when she was allowed to join his brothers in 1772. It was here, too, in the following year, that William's interest in astronomy really took off.

During the summer of 1774 the families moved again, to a house on the outskirts of Bath, described as 'situated near Walcot Turnpike'. The house had sheds and stables, to be turned into workshops, and a field for observing, but was inconveniently far from the concert halls so, after three years, they found themselves back in New King Street. The Bulmans had left them, in 1775, to return to Leeds.

The new house, No. 19 New King Street, had a garden, with a southern aspect, and it is a mystery why, two years later (1779) they again moved to the upper part of the town, this time to No. 5 Rivers Street. The house had no garden, which had important consequences for the future. One evening when William was observing the moon from the street, a Dr William Watson stopped to ask if he might take a look. He introduced Herschel to the Bath 'Literary and Philosophical Society', which had just formed, and it was he who read William's early papers to the Royal Society - starting with that on URANUS.

After two years the Herschels moved back to the convenience of No. 19 New King Street where, on 13 March 1781, William made the great discovery which not only changed their lives but altered the whole course of astronomical thinking for ever. The house is now called Herschel House, and is the only one of Herschel's dwellings known to have survived. It contains the Herschel Museum and is the head-quarters of the William Herschel Society.

Newsletter No 87 (July 1998)

Headlines

- **John Herschel's idea of preserving public records in microscopic negatives (1)**
Mr Masao Nakazaki, a member of the Society, wrote for newsletter readers regarding John Herschel's idea to preserve documents in microscopic negatives, which is one of his broad contributions to photographic technology.
- **Where did William Herschel live? (2)**
Please refer to the **Main Article**.
- **"Caroline Herschel", a story of a cloisoneé plate**
An essay by Ms Nobuko Iizawa, a member of the Society, on her creation of cloisoneé works. Ms Iizawa will hold a private exhibition of a "Caroline Herschel" plate and other cloisoneé works.
- **An exhibition on "the Science Museum, London" in Kobe, Kita-kyushu and Tokyo**
Notice of the above exhibition
- **Plans of a memorial plaque and possibly a telescope for W Lassell**
A plan to fix a memorial plaque for W Lassell's stay is going to be carried out in Malta. W Lassell is a British amateur astronomer who will celebrate 200th anniversary of his birth.

Main Article

Where did William Herschel live? (2)

A E Fanning

Berkshire and Buckinghamshire

William Herschel's appointment as King's Astronomer required him to live near Windsor so, in the summer of 1782, he and Caroline moved to Datchet, near the River Thames and some two miles from the Castle. The house was described as 'A Gentleman's Hunting Lodge' but was very run down. However, it had good out-houses and a field for observing, so William was delighted. It was here that the large 20-foot telescope was first

erected. However, after three winters of dampness and flooding, William became seriously ill, and it was essential to move on.

Clayhall Farm House, in Old Windsor, on the edge of Windsor Great Park and only a mile from the Castle, could have provided the ideal site for William to build 40-foot telescope he was already planning. However, he had to deal with a landlady (who Caroline described as a 'litigious woman') who threatened to increase the rent whenever he made improvements to the premises so, in April 1786, after only nine months, they moved again, and for the last time, to Slough (Clayhall Farm was sold to the Crown Commissioners in 1842 and was only knocked down in 1979 - the Commissioners probably being unaware of its historical significance.)

Observatory House, as it became known, was formerly called the Grove, on account of the many splendid elm trees that surrounded it - many of which Herschel had felled in order to clear his horizon. The house belonged to a well-to-do family named Baldwin whose daughter, Mary, married William in 1788. It was later renamed Ivy House. After William's marriage, Caroline moved into a cottage in the garden, from the roof of which she used to sweep the skies for comets and which then became known as Observatory Cottage. The name Observatory House came later, during 19th century. It was here that William built his giant 40-foot telescope, which stood over 50-foot high and remained a prominent landmark on the Ordnance Survey maps for 50 years.

William died in 1822, but the house was occupied by members of the Herschel family until 1960, when it was demolished.

It is fitting, however, that just as Herschel's telescope was a leader in the technology of his day, so the site is now occupied by the head-quarters of ICL, the leading computer company in the UK, and the building is still known as Observatory House.

Newsletter No 88 (September 1998)

Headlines

- "Caroline Herschel" absorbs visitors

Members of the Society visited the above private exhibition by Ms Nobuko Iizawa and enjoyed numbers of her cloisonné works. We also had a pleasant time of talking over dinner.

- Letters to our Society from Malta

Please refer to the **Main Article**

- John Herschel's idea of preserving public records in microscopic negatives (2)

Mr Masao Nakazaki, a member of the Society, wrote for newsletter readers regarding John Herschel's idea to preserve documents in microscopic negatives.

Main Article

Letters to our Society from Malta

I introduced a letter from the chief of Maltese Astronomical Society in page 5 of Newsletter No 87, however, I still had little response from readers for donation for a memorial plaque. I wait for your donation for a while. Thank you.

On 16th May I received a letter from Dr A Galea, another member of the society, as follows:

".. I am willing to write in your newsletter. Due to the research about Lassell's Malta connection being on-going and still far from exhaustive, it is difficult for me to give you a complete, scholarly account of Lassell's stay. However, I think it would be interesting if I were to write an overview of Lassell's life, with particular focus on his time in Malta. I envisage it would be a series of articles, mainly in chronological order. .."

After three days on 19th his long letter addressed to the editor of our Society came to me.

"Dear Editor, /I recently had the occasion to meet Mr Seiji Kimura, Secretary of the Herschel Society of Japan while he was on holiday in Malta. I had the pleasure to discuss

with him William Lassell's connection with this small Mediterranean island last century. /I have been reviewing some of the back copies of the newsletters of the Herschel Society of Japan. Reference is made to William Lassell in newsletter no 69 (July 1995) p 4. /I have written to you to clarify some points in that review, albeit almost three years have now passed since its publication. William Lassell came twice to Malta, in 1852 during which he spent a winter observing from Valletta, capital of Malta. He actually set up his telescope on St John's Cavalier, a cavalier being a structure in the fortifications surrounding the city which is higher than the rest of the defenses. The telescope he used at the time was the 24-inch equatorial, which has been recently restored in Liverpool. He returned in 1861, spending up to 1865 observing with his bigger 48-inch telescope from Tigne, Sliema. Only one of the three secondary mirrors is known to survive to this day, having been found in the Institute of Astronomy at Cambridge and now on display at the Whipple Museum of the History of Science. Th rest of the telescope is known to have been destroyed, after William Lassell had unsuccessfully tried to sell the telescope to a new observatory at Melbourne, Australia. /I hope the above is of interest to you and I look forward to further correspondence with the Herschel Society of Japan. .."

I soon wrote a letter to express my thanks to him and additionally to say: "... We are at any time ready to receive your contributions of any length. ... Photographs, maps and drawings are welcomed." I do not know when I can introduce his new letter, but please look forward to reading it.

Translation to English by Tatsuro Kimura

Newsletter No 89 (November 1998)

Headlines

- **Herschel's solar motion represented by stereographic projection**

Summary of the thesis written by Mr Akisato Sato, a member of the Society, on Herschel's study on solar motion,

- **Let's observe Herschel's planet**

Notice about an observation meeting held on 4th October at the observatory of Mr Hiroshi Narita, a member of the Society

- **Impressions of Cloisonné ware exhibition "Whisper of the Cosmos, Harmony of the Earth"**

Ms Nobuko Iizawa, a member of the Society describes his impressions to look the exhibition of Cloisonné ware made by another member of the Society living in Hokkaido.

- **1998 annual convention on 3rd Nov.**

Notice for the members of the Society on the annual convention held in Ikebukuro, Tokyo on 3rd November

- **The Science Museum & Lifestyle exhibition**

Please refer to the **Main Article**.

Main Article

The Science Museum & Lifestyle exhibition

"The Science Museum Exhibition" which I reported in Newsletter No 87, p 4 was held in Kobe, Kita-Kyushu and in Tokyo since 22nd July to 30th August, additionally being held Lifestyle Exhibition together. Near the entrance, Herschel's seven-foot telescope, 1781 was exhibited with explanation clearly stating that Herschel "... found a curious heavenly body by the same type of telescope as this. Many astronomers observed and revealed that it was a new planet, and named Uranus..." It is a mistake that some books say "Herschel found Uranus by this telescope."

Mr Tsutomu Ishibashi, a planet observer and a member of the Society who knows

mechanism of telescopes very well called me after looking the exhibition and suggested me if we could take Herschel's telescope with an eyepiece of an incredibly short focal length in our hands, when the telescope returns to the Science Museum in London. I will make a proposal next spring and shall we visit London in August, around the time of the total solar eclipse which can be observed in London as well.

Translation into English by Tatsuro Kimura
